

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 60
2016年 5月



▲2016年スタディーツアーでの一コマ。聖ヨゼフ学院小学生の図工の時間（エルサレム）

今春のスタディーツアーも、現地の人々の献身的な協力のおかげで無事に終わり、参加者は多くの実りを得て帰国しました。イスラエルとパレスチナの人々の温かいもてなしがとても身に沁みました。一方今回ほど銃声や人々の抗議の声などを間近に聞いて緊張したことはありません。昨年10月からのパレスチナ青少年によるナイフでの襲撃、それに対するイスラエル警察や兵隊による容赦ない“犯人”射殺など、緊迫はおさまっていません。人々の間には、不安、不信、憎悪の感情が高まっているのを感じました。

このような時だからこそ、敵対する国の若者たちを日本に來させて日本人の若者と交流させる「平和の架け橋」プロジェクトの意義は大きいと思います。今夏は「音楽とダンス」が大きなメニューです。音楽や踊りには、ことばや宗教の違いを超えて、すべての人の心を一致させ、喜びを生む力があります。今年も皆様のご支援をよろしくお願ひいたします。

井上 弘子 スタッフ一同



認定NPO法人
聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター（JANIC）によるアカウントビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野（組織運営・事業実施・会計・情報公開）について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email ispalejpn@gmail.com TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

「10コ、センエン!」のファディ、夢を叶える

井上弘子(当法人理事長)

今年4月、日本の巡礼者とともにベツレヘムの羊飼いの教会を訪れた時、一人のパレスチナ人青年が「ヒロコ〜、ヒロコ〜!」と叫びながら駆け寄ってきて、私をきつく抱きしめてくれた。それは15年ぶりに再会するファディだった。

彼に初めて会ったのは、25年くらい前、「10コ、センエン!」「10コ、センエン!」と言いながら、金色の魚の形をしたキーホルダーを巡礼客に売っていた7歳の少年だった。その頃巡礼された中には憶えておられる方もあるかもしれない。私はベツレヘムへ行くたび、日本人の方々に、「彼が学校へ行かれるように、良かったら買ってあげてください」とお願いしていたのである。

次に会ったのは、彼が高校を卒業してアメリカに行く前。すっかりたくましくなり、ひげも生やし始めた彼の姿にびっくりしたものだ。アメリカへ行くという夢の実現を前に、期待に胸を膨らませていた。

そして今回の3度目の再会。私の姿を見かけた親戚から、「ヒロコがベツレヘムに来ている」と連絡を受けて、すぐ車に乗って駆けつけたのだという。今はもう32歳、1枚の名刺を渡してくれた。彼の名前や住所とともに、「みやげ店」の表記があったので驚いた。昨年ベツレヘムに帰り、14年間アメリカで貯めたお金で、聖誕教会近くに大きな店を出すことができたのだとい



▲立派に成長したファディと。(羊飼いの野の教会・ベツレヘム)

う。そしてこう付け加えた。

「Japanese people made my way, thank you very much!!」(日本の方たちが私の道を開いてくださった。ありがとう!)

その場におられた方々は、恩を忘れず心から感謝するファディに感動された様子。私も彼の成長した姿と素直な感謝の言葉に胸が熱くなった。

聖地では、ファディのほかにも多くの子どもたちが、日本からの支援に感謝しながら勉学に励み、夢の実現に向けて頑張っている。

日本の皆様が聖地の子どものために支援を続けてくださるその実りの一つがファディなのだ。

2016 スタディーツアーを振り返って



▲ツアー終盤、荒れ野の海拔0ポイントで最後の記念撮影。

2016年春のスタディーツアーに参加した若者の感想を紹介します。

辰巳 奈緒

2014年夏、シリア国境に近いトルコ辺境の町、

シャンウルファでシリア難民にインタビューをした。日本人の立場から、彼らに何ができるのか。当時、その答えは出なかった。

「あなたたちは何もしてくれない。だから私は神に祈るの。」というシリア難民女性の言葉が、しこりのように心に残っていた。紛争で帰る場所をなくした人々に対して、私は何ができるのか。その答えを探すため、このツアーに参加した。

イスラエルとパレスチナは、分離壁によって物理的に隔てられている。高さ8mの壁は、予想以上の威圧感でそびえ立っている。最も印象的な光景だ。分離壁の建築が始まったのは2002年。以来、イスラエル人とパレスチナ人との交流は以前にまして減ってしまった。分離壁という物理的な壁は、両者

の間に心理的な壁も構築してしまったのだ。イスラエル人はますます「テロリスト」としてパレスチナ人を捉え、パレスチナ人はますます「占領者」としてイスラエル人を捉える。疑心暗鬼が敵意と恐怖を増幅させ、そこから生じる暴力が憎悪を生み、負の連鎖が起きている。

両者の間の壁を低くするために、できることはないのか。長期的には「教育」に希望を感じた。プログラム中、エルサレムの「Hand in Hand (手に手をとって)」という学校を訪問した。イスラエル人とパレスチナ人の子どもが一緒に学んでいる。互いの文化や宗教、歴史を理解することで、両者は敵同士ではなくなるかもしれない。

短期的には、SNSが有効な手段となるかもしれない。Facebookの「Add to Friends」は、互いの日常を同一ウォール上に共有する。イスラエル・パレスチナ間の情勢が不安定になれば、互いの身を案じてメッセージを飛ばす。他人事が、友だちの抱える問題になる。実際にこれまで本ツアーに参加した学生は、今でもSNS上で繋がっているという。そうして心の壁を低くすることが、分離壁をなくす一つの手段になるかもしれない。

心理的な「壁」は、日本とイスラエル・パレスチナの間にも存在する。それは、無関心の壁である。私は本ツアーに参加するまで、パレスチナ問題に関心をもつことはなかった。無関心であるがために、そこでの実状や苦境を知ることもなかった。

日本人の私にできることは、日本とイスラエル・パレスチナの間に立つ、無関心の壁を取り払うことではないか。本ツアーでの経験を、少しずつでも発信していきたいと思う。

梶原 裕史

今回のスタディー・ツアーは、私にとって、紛争に苦しむ人々と向き合う旅であったが、同時に自分のエゴイズムと向き合う旅でもあった。

最初は、紛争の中に生きる人々の困難な状況や、愛する人が犠牲になり傷つけられた人々の心に触れても、私は無感動であった。私にとって所詮それは他人事であり、同情の“ふり”をしたところで偽善

にすぎない。自分に嘘はつけないので、ツアー中の分かちあいでも、私はたびたび、自分の“冷酷な”心をさらけだした。

しかし日が経つにつれ、私の心や考え方が変わってきた。その土地に暮らす人々と共に同じ時を過ごして、心と心を接することができたからではないかと思う。とくに子どもたちの明るく生き生きとしていた姿には胸を打たれた。いつしか私は子どもたちの将来や、その地の未来までもを考えるようになっていた。

人は誰しもエゴイズムを持っている。多くの人はそれを包み隠して生きているだろう。私が敢えて自分をさらけ出しても、現地の人は私を温かく受けとめてくれた。国や宗教や主義主張を超えて、彼らの気持ちに少しでも寄り添い、心を通わせられたことはとても嬉しい。心と心の繋がりを深めることができたと思う。

加藤 結子

私には好きな言葉がある。『Spero dum spiro』(生きている限り、わたしは希望を抱く) 子どもの頃、新聞で出会った言葉。古代に生きた人がどんな思いでこの言葉を残したか、私には知る術もない。

しかし、このシンプルな言葉の持つ力に私は幾度となく救われた。困難が立ちはだかった時、悲しみに打ちひしがれた時…遙か昔からこの言葉を今に繋いで来た人びとに思いを馳せる。たったひとつの灯火のように私をいつも奮い立たせてくれた希望の言葉だ。

パレスチナ問題に関心を持ち、そこに苦しむ人びとに対して直接的な支援をする。そんな漠然とした思いを具体化するためにも、現地に赴きこの目で見て感じたい。この度の「平和を願う対話の旅」に参加し、多くの学びと何物にもかえがたい経験をさせていただいた。私の人生観を揺るがすと言っても過言ではない、そんな衝撃的な旅となった。帰国後二週間以上経過した今もまだ消化しきれていない。

パレスチナの人びとの現状は、想像以上に過酷なものだった。問題は深刻で解決の困難さを痛感した。住む家を追われ、隔離・監視され、暴力にさら

される。迫害の苦しみを誰よりも知るユダヤ人が、なぜ同じことを繰り返すのか。私には到底理解できない。しかし一方で、イスラエルでもパレスチナでも、ありふれた日常の喜びや幸せがあった。何気ない幸福の尊さ。日本にはつい忘れてしまうような温もり気づくことができ、感謝している。

現地スタッフにヤクーブというパレスチナ人男性がいる。彼はもう何年もこのNPOの活動に参加しており、ツアーの成功に欠かせない存在だそう。

ある朝エルサレムで、紛争の現実を思い知らされる出来事がわたしたちの目の前で起こった。彼の同僚が巻き込まれて重傷を負ったのだ。そのとき彼が言った「Hopeless」(希望なし)という言葉。そこに含まれる悲しみや憤りは重く、パレスチナ問題の解決がいかに困難かを物語っていると思う。私の希望

はなんと平坦で薄っぺらで、安直なものだろう。和平がいかに厳しい合意のもとで築かれるのか、日本にいて知る由もなかった。

絶望しかない状況で、けれども、私は希望を持ち続けたいと思う。絵空事で楽天的過ぎるかもしれないが、私は希望を信じたい。このような自分の気持ちをあらためて確認することは、イスラエル・パレスチナに来なければできなかった。

この旅は私の人生におけるひとつの楔となった。



「平和とは何?」と問われて考えること

村上 宏一(当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長)

「あなたにとって平和とは何ですか?」これは当NPO法人「聖地の子どもを支える会」が、日本の若者をイスラエル・パレスチナに派遣して現地の状況を学んでもらう「スタディーツアー」や、イスラエル・パレスチナ・日本の若者が共同でボランティア活動などをする「交流プロジェクト」への、参加者募集の際に必ず尋ねる質問です。ふだん突き詰めて考えることの少ないこの問いに対し、応募者の答えは「安心して眠れること」「それぞれが自分の権利を生かしながら幸せを求めて生きられること」「ひととこ所で安心して日常生活を送れること」など表現はさまざまですが、共通して言えるのは平和の基本的な条件の一つ、「人間の尊厳を脅かす戦争や紛争がない状態」です。

この、日本にいれば普通と言っていい状態は、世界のいろいろな所で当たり前とはとても言えないものとなっています。今年3月のスタディーツアーでは、エルサレムの旧市街近くに泊まってい

た宿舎の前で、イスラエル兵が盛んに発砲するのを目の当たりにしたそうです。写真を撮りに走り出ようとする研修生たちを、引率の井上弘子・当NPO理事長はあわてて制したといひます。

こんな話があります。ずいぶん前のことですが、ある中東研究者がヨルダン川西岸のヨルダンとの境界近くを走るバスに乗っていた時、爆発音なのか銃声なのか何かがはじける音がしたので身を伸ばして外を見ようとしたら、乗り合わせていたイスラエル人乗客たちは一斉に身をかがめ、「伏せろ!」と言ってきたというのです。常に危険と隣り合わせの状況に置かれている人々と、そんな経験をするのがほとんどない日本人との対応の違いです。筆者が経験して印象に残っているのは、イスラエル国内の地方のバス停で列に並んでいた時、切符を買っておこうと思い荷物を置いて後ろに並んでいる人に「切符を買いに行く間、荷物を見ててくれないか」と頼んだら、断られたことです。「なんて不親切な」と思ったら、その人

いわく「この荷物が爆発物ではないという保証はない」とのこと。これもいつ、どこでテロに遭うかわからないという状況下にある国民の、いわば常識なのでした。



3月に放映されたNHKのBS1「ザ・リアル・ボイス」という番組で、銃の所持規制の是非について語るアメリカ市民の本音が紹介されていました。アメリカではしばしば銃の乱射事件が起きており、オバマ大統領が、銃の所持規制強化が必要だと訴えています。そのような世論が高まって当然だと思えるのですが、番組を見ると大違い。ミズーリ州、テキサス州などの各地の「ダイナー」という庶民的なレストランでお客様に尋ねて回る度に、返ってくる答えは「銃の所持は当然」「憲法でも保証している個人の権利（市民の武装の権利）」というものでした。規制に反対する理由は「銃を悪用したり乱射事件を起こしたりするような連中は、どんなに規制されようと銃を手に入れる。法律を守る善良な市民が武器を持たず、危険から身を守ることができなくなるのはおかしい」というもの。「乱射犯人は防備の手薄な所を狙う。みんなが武器を持ってたちまち反撃されるような所は狙わない」といったことを話す人もいました。

そういえば、パレスチナ人の若者が刃物で襲ってくるテロが頻発しているイスラエルでは、エルサレム市長が去年10月、イスラエル人市民が銃を持ち歩くのは義務だと述べた、と報じられました。だれもが銃を持っていれば、緊急時に警官隊に協力できるからというのです。

イスラエルは、少しでも攻撃を受ければすぐさま倍返し以上の反撃を加える態勢と、周辺アラブ諸国を圧倒する武力を備えています。敵に囲まれ、侵攻をはね返せなければ地中海に追いつとされると、かつて語られたような安全保障上の不安はないといっていいいでしょう。だからイスラエルが平和だと言う人は、そうはいないはずで

す。既に述べたように、この1年余り、刃物を持ったパレスチナ人の若者によるイスラエル人への攻撃が頻発。4月18日にはエルサレムの路線バスが、イスラム過激派組織ハマスによる自爆テロに見舞われました。自爆テロは2004年以來のことです。

人々は被害者としての不安を抱え、怒りを募らせていますが、テロに走るパレスチナ側にも、イスラエルが築いた壁に囲まれ文字通りの閉塞状況への、被害者としての不満と怒りがたまっていくばかりです。その矛先は、まともな戦いなど不可能な中でテロに向かい、イスラエルによる反撃と締めつけの強化につながるという悪循環です。

暴力的な対決の場面があふれる世の中に、ハッと胸を突く光景がインターネットで流されているのを見ました。2013年12月、ウクライナの首都キエフで、ズラリと並んだ治安部隊の前に1台のピアノがポツンと置かれ、男性がたった一人でそれを弾いているのです。親ロシア派の政権に反対するデモが激しくなりだしたころのことで、ネットで世界中に配信された映像を音楽家の坂本龍一さんが東京新聞で紹介したものです。発信したウクライナ人は「優しさは暴力や残虐な行為を壊すことができる」と、感想を述べているそうです。

安全保障が他者の善意に頼れるほど単純なものではないことは、世界のあちこちで起きる争いを見れば明らかでしょう。それでも私たち日本人は、危険への反応力が弱い自分たちを「平和呆け」と卑下しなくてもいいと思います。むしろ、第2次世界大戦後の長い年月、他国・他民族と殺し殺される争いとは無縁だったこと、そのおかげで、いつ攻撃を受けるかわからないという殺伐とした緊張からは遠いことを、ありがたく思っているのではないのでしょうか。戦争ができる国になることで胸を張ろうとするより、武力に訴えずに争いをなくす道を追求し続けることで国際社会に存在感を示せたら、その方が誇らしいことだと思いませんか。

ユースグループ活動の経過

中尾有希 (当法人ユースメンバー)

皆様の温かいご支援に心より感謝申し上げます。2014年度「平和を願う対話の旅」および「平和の架け橋 in 東北」参加者の中尾有希と申します。2015年10月に「聖地の子どもを支える会」ユースグループを立ち上げた際の発起人の一人です。現在までの約半年間でユースグループが行ってきたことをご報告し、今後の目標もご紹介します。

これまでの中心的活動の一つが、ユースグループの組織化です。立ち上げの際には抽象的であった活動方針を具体化し、さまざまな側面をよりシステムティックになるよう改善しました。例えば、役職の割り振りです。ユースグループの組織図を作り、メンバー各自に任期半年で役職を割り振りました。これにより、いろいろな仕事の責任の所在や進捗状況が明らかになり、連絡系統も分かりやすくなりました。人数不足や、役職ごとの仕事量の偏りなど、改善しなければならない点も多数ありますが、課題が明らかになっただけでも組織化の意義はあると思います。その他、定期ミーティングの進行法や書類の管理、連絡手段の整理など、試行錯誤しながら改善しています。

第二に、ユースグループとして正式にボランティア募集を開始しました。募集範囲は高校生から社会人までと幅広いですが、各人の経験や知識を当NPOのために生かしてもらえれば、との考えからそのように致しました。当NPO事務局の大きな支えによって応募手続きを明確化・簡略化し、またSNSや説明会の開催などの広報を通して、

より多くの人々が応募しやすいように工夫しました。現在、数名の応募があり、今後ユースグループおよび当NPOの活動を共に盛り上げていくことを期待しています。

第三に、これまで当NPOに関わって来た若者たちのリユニオン(大同窓会)を二回開催致しました。これまでのスタディツアーや夏のプロジェクトの参加者間の結束を強めるという、ユースグループの活動方針に基づいたもので、二回でのべ30人が参加しました。特に先輩との出会いは、当NPOとの関わりがその後の学生生活や就職にどんな影響を及ぼしたかを聞く良い機会であり、直近の参加者には刺激的で興味深い経験となったようです。今後も、年に二回のペースでリユニオンを開き、当NPOを通じて育まれた友情が世代を超えてつながることを一同願っています。

第四に、広報活動の拡大と充実化を図ってきました。これまで事務局が一手に引き受けてきたTwitterやFacebookなどSNSの更新の一部をユースメンバーの役割とし、投稿内容の多様化および充実化、そして投稿頻度の増加を図っています。SNSで当NPOをフォローして下さっている方の中にはお気づきになった方もいらっしゃるかもしれません。また、広告制作に秀でたボランティアスタッフの貢献により、ボランティア募集やイベント広報のためのフライヤーを作成することが出来ました。紙媒体・SNS共に、内容だけでなく、ビジュアル面(写真やイメージなど)を拡充することが、今後引き続きの課題です。

ユースグループの直近の目標と課題は、
①ユースボランティアシステムの整備と円滑化、
②2016年度「平和の架け橋」プロジェクト(関連するチャリティイベントと講演会も含む)運営・

「平和の架け橋 in 長野 2016」プロジェクト 支援イベントのお知らせ

イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい

家田 紀子 ソプラノコンサートと
ビュッフェのひとつき

6/26 (日) **11:30** (開場11:00)

ニコラ・パレ(幼きイエス会)

9階ホール

¥5,000 80名限定

出川 展恒 でがわのぶひさ
NHK解説委員

講演会 混迷する中東情勢を読む

7/3 (日) **12:00** (開場11:45)

カトリック吉祥寺教会 ¥1,000

チケットのお申し込み・お問い合わせは…… TEL 03-6908-6571 (当法人事務局) TEL 090-6538-3255 (井上)



▲カフェなどで行うミーティング

企画への積極的参加、③SNS及び紙媒体による広報活動の更なる拡充です。中・長期的には、④

ボランティアメンバーが常に30人ほどいるようにし、それにより⑥ユース主催の勉強会、ランチツアー、講演会などのイベントを開催することを目指しています。仕事に優先順位をつけながら、着実に進んでいければと思っています。

最後になりますが、改めて支援者の皆様に感謝を申し上げます。資金的なご支援だけでなく、いつも当NPOを心に留め、活動を応援してくださっていることにも感謝致します。ユースグループ同、足りない力を合わせて頑張りますので、今後とも応援をよろしくお願い致します。



Follow Us! FacebookやTwitterで情報発信中。「フォロー」や「いいね」をして、最新情報をチェックしてください。

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN
平和の架け橋
PROJECT 2016
in長野

イスラエル・パレスチナの参加者をご紹介します

プロジェクト実行委員会では現在、イスラエル・パレスチナからの参加メンバーを選考中です。参加が決まった若者たちをご紹介します。

イスラエル



モール・ニクソン (25歳)

2014年「平和の架け橋」プロジェクトに参加。音楽、旅行、スポーツなど多彩な趣味を持つ明るい青年。兵役中はレスキュー隊に属し、大好きな犬とともに人のいのちを救うことに誇りと喜びを感じていました。イスラエル側のリーダーとして参加します。

ドール・ベエリ (20歳)

小さい時から歌うことが大好きで、有名なモラン合唱団に参加。平和の問題に関心があり、話し合っ互いに知り合えば、平和共存は可能だと考えています。現在兵役中、プロジェクトには軍の特別許可を得て参加します。



リオール・レヴィ (23歳)

バレエ、ピアノをたしなみ、8年間モラン合唱団に参加。病気や障害のある子どもたちのため音楽ボランティア活動。愛する人々と喜びや悲しみを分かち合うことが大切と考えています。宗教も年齢も肌の色も違う人々が受け入れてこそ平和が来る、という信条。兵役終了。



リタル・エルカーム (22歳)

歌、踊り、ギター演奏が大好きなシンガーソングライター。オーストラリア滞在中、イスラエル・パレスチナ問題でメディアの影響による間違った見方が多いのに驚き。イスラエルについて正しい知識を伝え、またパレスチナの人々とも共存できるようにと希望。兵役終了。

パレスチナ



カッセム・シャリフ (24歳)

2009年、当法人によるイスラエル・パレスチナプロジェクトに参加。今年、ナブルス大学医学部を卒業。医師として、社会的弱者の役に立ちたいといひます。フルートを演奏する。イスラエル・パレスチナ合同の「中東・明日の起業家育成」プログラムに参加。パレスチナ側のリーダーとして参加します。



ラナ・ランティシ (22歳)

ビルゼイト大学で経済とマーケティングを学ぶ。スエーデン留学経験。現在カリタス・エルサレムで働き、ラマラYWCAのスタッフでもあります。歌やダンスが大好き。宗教、文化、言葉が異なる若者たちが忍耐や赦し、他人への思いやりを学べば、平和は来ると考えています。「平和」は「私」から始まるはずだから、と。



ヤラ・スレイク (25歳)

ハイファ大学で音楽を専攻。現在音楽教師。いろいろなジャンルの音楽やダンスをこなします。イスラエル国籍を持つアラブ人として双方を理解できる立場にあります。平和を構築するためには、平等と正義と相互理解が必要だと考えています。

上記のほか、パレスチナ人2人を選出する予定です。



幼い命に罪はない

◀▼いずれも「名誉殺人」を免れた子どもたちの乳児院「飼ひ葉桶」で。(ベツレヘム)



◀テレサと名付けられた生後2、3日の赤ちゃん。夜中に乳児院の玄関前に臍の緒がついたまま捨てられていた。ミルクをぐいぐい飲み「生きようとする力に感動しました」と乳児院のシスター。

今日も楽しくお勉強 聖ヨゼフ学院での授業風景 (エルサレム)



街で出会った子どもたち



▲ユダヤ人の男の子の成人式「バル・ミツバ」。12歳になると親戚中で盛大にお祝い。

イブラヒム神父をかこんで ▼イスラエル人たちと食事タイム。



▲コーヒーを飲みながら談笑。
(エルサレム旧市街・イスラム教徒地区)



▲兄弟で店番中。(ベツレヘム旧市街)
ベツレヘム大学の女子学生▶

